View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Wakayama University Academic Repository

翻 訳

ユカギールの民間伝承の特徴[1)]

―― W. ヨヘリソンのユカギール民族誌より ――

遠　藤　　史

ユカギールの宗教を扱った章の導入部分（本書 pp.135−140 を参照）で私は，この民族（ユカギール）が隣接諸民族から強い影響を受けてきたと述べた。ユカギールの神話体系についても同じことが言える。他の民族から借用された要素が多くのユカギール神話や民話に見出される。ユカギール自身もこのことに気付いていて，民話の借用元の民族についてユカギールが指摘してくれることもある。たとえばこの巻に含まれたテキストや翻訳にも[2)]，またロシア科学アカデミーによって出版されたものの中にも[3)]，ツングースの，ロシアの，ヤクートの，あるいはチュクチの，と標記された神話や民話がある。

ここまでの議論で私は，小説的な興味がこれらの物語に入り込み，真の神話と娯楽の目的に供される創作された物語とを結びつけていることを指摘した。

現代のユカギール民話は主に，原始的宗教が衰退した時期の特徴を持ったおとぎ話である。それでも，これらのおとぎ話が根ざしているのは彼らの世界認識である。

民話の内容を概観する際には，ユカギール自身の要素と外来の要素とを区別することが必要だろう。しかし他の民族から借用された民話の多くは，ユカギールの一般的な考えに合うように，かなりの変容を被ったものである。借用された民話は，もともとの民話に比べて短い。それらの民話は想像から来る驚きや，もともとの民話の持っていた完全さを欠いている。たとえば，チュクチやヤクートから借用した民話に関してこのことが言える。ユカギール民話全体は衰退の時期にあるように思われる。この民族自身と同じように消え去りつつあるか，あるいは隣接諸民族の民話の影響の下に姿を没している。現在のユカギールの伝承の中に宇宙論的な民話がないことは，このことによって説明できる。最も雄弁なユカギールの語り手である，ヤサーチナ川流域のスピリドノフ老人でさえ，世界の創造に関して何事も語れなかった。彼の言うに

1）［訳者注］本篇は民族学者 Waldemar Jochelson（1855−1937）によるユカギール民族誌 *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*, Volume IX, Leiden E.J.Brill, 1926（『ユカギールとユカギール化したツングース』）の第 14 章（“Characteristics of Yukaghir Folklore”, pp.298−309）の翻訳である。なお今回の翻訳より，民族名として「ユカギール」を訳語に採用している（他の民族名としてはコリャーク，チュクチ，ヤクートなども）。

2）　本書の民話テキストおよびその自由訳 pp.241−297 を参照。

3）　W. Jochelson, Materials for the Study of the Yukaghir Language and Folklore collected in the Kolyma District, Part I（本文ロシア語）, Petrograd, 1900. Publications of the Russian Academy of Sciences.

は，「昔の人々はそれを知っていたが，今の人々は知らない」とのことである。

以下において私たちはワタリガラスが創造者としても，また変身者としても現れないことを見ることになろうが，以前はワタリガラスがこの役割を付与されていたと考えることもできよう。ユカギールは，あたかも人間の出現に興味がないがごとく，聖書の創造物語を取り入れることもしなかった。私がユカギールから聞いた唯一の聖書の物語は，大洪水が地元の状況に合わせて変えられたものである。

> 昔々，神は洪水を与えた。コリマ川の水位は上がり，国全体が，高い山に至るまで水浸しになった。人間と動物は罰せられた。ノアという名の一人の男だけが大きな筏を作り，その筏で家族とあらゆる種類の動物のつがいの命を救った。動物の中でマンモスだけが，身長と体重が非常に大きいため，筏の上に場所を見つけることができなかった。マンモスが水から出て，筏の上に乗ろうとして足を置くと，筏はひっくり返りそうになった。そこでノアはこの危険な動物を急いで外に押し出した。

このようにしてユカギールはマンモスの完全な絶滅を説明しているのである。

コリマ川上流地域の民話の多くは男性によって語られる[4)]。ツンドラでは私は女性の語り手には全く出会わなかった。一方コリャークの場合，たいていの語り手は女性である[5)]。

次に，ユカギール民話に見られる挿話とプロットの簡潔な比較検討に進もう。まず初めに動物の出てくる民話を考察することにする。

ワタリガラスに対するユカギール語の古いことば *xa'rameñ* はツンドラ方言に保たれている。現在では，コリマ・ユカギールはワタリガラスを *čomo'-paranā*，ロシア語の単語 *vorona*（*paranā*）とユカギール語の単語 *čo'mo*「大きい」から成るもので，大鴉と呼ぶ。しかしながら老人たちはワタリガラスに対する古い単語 *čo'mmodo* あるいは *čo'mmodi*―つまり *čomo*「大きい」と *nodo*「鳥」から成る「大きな鳥」―も覚えている。このことばから推察できるのは，ワタリガラスが他とは違う神話的存在として崇められていることであろう。（ちなみに）どのような群においても，目立つものは何でも *čomo*「大きい」ということばで呼ばれる。たとえば，最も上等で高価な魚のネリマ（*Coregonus leucichtys*）は *čo'mani*，つまり *čo'mo*「大きい」と *a'nil*「魚」から成る「大きな魚」と呼ぶ。この地域の北極圏で最も重要な川であるコリマ川は *O'nmun*，あるいは大河を意味する *čomo'jed-u'nuñ* と呼ばれる。

ユカギールの神話体系が残存したものの中で，ワタリガラスが創造者や祖先とはとうてい見なされていないことはすでに述べた。しかし排泄物をつまみ上げたり貪り食ったりする卑しいトリックスターとしてワタリガラスが現れる民話は，コリマ川流域にも，ツンドラにもある。ツンドラでの民話には縁結びのモチーフも見られる（p.289 を参照）。ワタリガラスの姿は，排泄物をつまみ上げるその性癖のために，どこでも嫌われる。同じ民話は，チュクチ，コリャーク，カムチャダール，アジアのエスキモー，コディアックのエスキモー，インディ

4）［訳者注］現在のコリマ・ユカギールでは，民話を女性が語ることも多く行われている。

5）W. Jochelson, The Koryak, pp.125−308 を参照。

アン，そして私の最近のアレウト民話集にも見出される。

白いワタリガラスが黒に変えられた出来事は，２つの民話に見られる。ツンドラ･ユカギールの民話ではカイツブリがワタリガラスを騙して黒に変えたし（pp.274−275 を参照），コリマ･ユカギールの民話ではワタリガラスがひどくぶたれて黒になったとされる（pp.244−245 を参照）。

ワタリガラスが黒に変わったという挿話は，北西インディアン[6]ばかりでなく，スラブ，エストニア，フィンでも見られる[7]。

ある民話では（pp.288−289 を参照）太陽の消滅という出来事が起こる；しかしそれを解決するのはワタリガラスではない。ライチョウがくちばしで空を突き刺すのである。この民話はチュクチから借用されたものであろう。これはチュクチの起源につながるものだから。

野ウサギはユカギール民話では顕著な地位を占める。野ウサギは，他のけものの裏をかく，賢くて機敏な動物として現れる。ある民話で[8]野ウサギは，策略を用いて若いオオカミを殺す。するとオオカミの母親は，ヘラジカ，熊，トナカイ，オオカミを呼び寄せ，野ウサギを試練にかけようとする。彼らが野ウサギの家に行くと，野ウサギはうやうやしく迎える。野ウサギは彼らのために草の小屋を建て，歓迎会を準備するという口実で彼らをその中に置き去りにする。それから小屋の扉を閉めて火を放つ。裁き手たちは窒息し，焼けた彼らの肉は長い間野ウサギの食べ物となる。その後，野ウサギは異界の老人を殺す（p.154 以降を参照）。それからあらゆる種類のキツネを宴席に招き，それらを倉庫に閉じ込め，義理の父に婚資として献上すると，義理の父はキツネたちを殺してしまう。この最後の挿話はコリャーク[9]とエスキモー[10]の民話にも見られる。

他の民話では，野ウサギは家畜として現れる[11]。犬橇用の犬の代わりに野ウサギが橇に付けられ[12]，長い間縛られていたトナカイは野ウサギに変えられる（p.117 を参照）。野ウサギが野ウサギ氏族のトーテムだったかもしれないことは，以前に指摘した（p.117 を参照）。

野ウサギの耳の先端が黒い理由（p.252−254 を参照）は，チェレミス，フィン，ヴォチャーク，アイヌの民話[13]にも出現する挿話によって説明される。ライチョウの尾の黒い先端の起源も同様に説明される（p.252−254 を参照）。

キツネはずるく，人を欺く動物として現れる。ある民話では[14]，キツネはヘラジカに山腹

6） F. Boas, Indianische Sagen, p.241.
7） O. Dähnhardt, Natursagen, Band III, Tiersagen erster Teil, 1910, pp.143, 311, 495.
8） W. Jochelson, Materials, etc., pp.11−17 を参照。
9） W. Jochelson, The Koryak, p.319 を参照。
10） Boas, Baffin Land Eskimo, pp.216, 324 を参照。
11） Jochelson, Materials, etc., p.2 を参照。
12） 同書 p.6
13） Dähnhardt, Band III, pp.49, 72, 76, Band IV, p.278 を参照。

を滑り降りることを提案する。キツネは鋭いナイフを坂の途中に隠し置き，ヘラジカは膝で滑り降りようとして腹を裂いてしまう。ヘラジカは死に，キツネはその肉を食べるのである。キツネの求めに応じてオオカミが自分の尾を氷の穴に入れるという出来事が２つのユカギール民話に見られる[15]。その１つでは，この出来事が，キツネが死んだふりをするというもう１つの出来事に先だって起こる。魚を運んでいる猟師がキツネを取り，橇に乗せる。キツネは道に落ちた魚に向かって身を躍らせ，飛び降りて魚を集め，家に持ち帰る。オオカミがキツネにどこで魚を見つけたのか尋ねると，キツネは自分の尾を氷の穴に入れて捕まえたのだと答える。この両方の挿話はおそらく，ユカギール人がよく聞くロシア民話から借用したものであろう。これらはまたヨーロッパの民話，アメリカの黒人の民話，また直接あるいは間接にヨーロッパの源から得たインディアンの民話でも見られる[16]。木に留まる小鳥の民話もまたロシア民話でよく見られるものである。ユカギールはこの挿話を次のように語っている[17]：

> カラスが自分の仔たちと，木にある巣にいた。キツネがその木に足をぶつけ，「家を作るのに良い木だ！」と言った。カラスはキツネに，木を倒さないように頼んだ。キツネは，「子どもを１羽よこせば，そっとしておいてやる」と言う。カラスが仔を１羽投げ落とすと，キツネはそれを食べて立ち去った。しかしキツネは同じ策略を更に２度繰り返し，更に２羽の仔をもらった。ついにカラスのところにブラックバードがやってきた。何が起こったのか聞いたあとで，ブラックバードはカラスに，「斧を持ったキツネを見たことがあるか？」と言う。それから後は，カラスは自分の仔をキツネに与えるのを止めた。

この挿話はアフリカ，フィンランド[18]，およびコリャーク[19]においても見出される。同様の民話には，熊が男に撃たれるように仕向けるキツネのものがある[20]。キツネが熊に会い，「おじいさん，首の皮が薄い奴（人間のこと）に会うのが怖いかい？」と尋ねる。熊は「全然怖くない。俺は奴らをベリーのように食べるのだ」と答える。キツネが男のところに行き，男を熊のいる場所に導くと，男は矢で熊を撃つ。私は同じ民話をコリャークのところで記録した[21]。この両方の例で，民話はまた別の挿話で閉じられる。傷ついた熊は家に戻り，いとこであるシャーマンのクズリを呼びにやる。クズリは熊の傷を癒そうとして，シャーマンの儀式を始める。傷口から脂肪が出てくるのを見て，クズリはそれを食べる。熊は痛みで叫び声を上げ，クズリを蹴る。クズリはかまどの火の上に落ち，背中を火傷する。クズリが家に駆け戻ると，ク

14）Jochelson, Materials, etc. p.20 を参照
15）同書　pp.20, 68.
16）Dähnhardt, Vol.IV, p.228, Vol.III, p.328, および Journal of American Folklore, 12, 112 を参照。
17）Jochelson, Materials, etc., p.66 を参照。
18）Dähnhardt, Vol.IV, p.279 を参照。
19）Jochelson, The Koryak, p.184 を参照。
20）Jochelson, Materials, etc. p.13 を参照。
21）Jochelson, The Koryak, p.185 を参照。

ズリの母は燻製の皮の一片を焼け焦げた背中に縫い合わせる。その時から，クズリの背中は黒いのだ。

コリャーク民話では[22]，キツネ自身が熊の傷を癒す。キツネは赤熱した石を傷に差し入れる。熊は死に，キツネは自分の仔たちに熊を殺したことを語る。

インディアンの民話では，コヨーテが戦士になりすましてアライグマを傷つけ，その結果脂肪が傷口から出てくる。アライグマが家に戻ると，コヨーテは傷を癒すふりをして脂肪を引っ張り出し，アライグマを殺す[23]。

シャーマンの衣裳（pp.169, 171 を参照）を描写する際に私は，ユカギールの信仰においては，男は動物の皮を身にまとうことによって動物に変わることがあると指摘した。この考えは，多くの原始的な民族に共通するもので，特に古アジア諸民族，北西海岸インディアン諸民族，およびアレウトに顕著である。あるユカギール民話では，3 人の姉妹が父の死への復讐をとげるために，単にオオカミの姿勢や動きを真似るだけでオオカミに変わる。

人間が動物に変身することはユカギール民話によく見られる要素である。たとえば，犬が人間に変わり，神話の老人が器量の良い若者に変わり，メスのトナカイが可愛い少女に変わる。

私は以前に，アニミズムとアニマティズムという観念の間にはっきりした線を引くことが難しいことを指摘した（p.138 を参照）。これら２つの観念の特徴は２つの民話によく表象されている。その１つでは，山の頂上が生きもののように行動する。この民話は，コリマ川上流の河岸にある山頂に関するロマンティックな伝説である。

> 「広い心」という名の円錐形の山頂は美人で，隣り合う２つの山頂と密かな関係を持っていた。「広い心」は一方の恋人の子をはらみ，息子を生む。競争相手の頂上はこれに気付くと，「広い心」の息子をつかみ，川に投げ込む。息子は川を流れていき，岩の島に変わった[24]。「広い心」は嫉妬深い恋人を打つ。恋人の叫びは川沿いのあらゆるところで聞こえた。川沿いの山頂は困り果て，「人々があそこで争っている」と言い合った。

ここでは山頂が自分たちのことを「男」と呼んでいる。

もう１つの民話によれば，山そのものに命が宿ってはいないが，石の娘が山の中に住んでいる。動きたくなると，この石の娘は，石でできた上着を裂く。

神話上の怪物のいくつかは，目が胸の真中にあり，口が腕の下にある頭のない人間として，あるいは不完全な人間として描写される。

頭と心臓は最も重要な臓器として現れる。ある民話においては，英雄は心臓が切り刻まれて燃やされるまで死なない；他の民話では，英雄の切り落とされた頭は死なず，敵のところ

22） Jochelson, The Koryak, pp.185, 188 を参照。

23） Boas, Kathlamet Texts（Bureau of American Ethnology, Washington, D.C., 1901）p.153 を参照。

24） ［訳者注］コリマ川の中にあるこの「岩の島」の写真と思われるものが，本書 p.342 の直後に挿入された写真にある（2 番の写真）。

から逃げ去る。

上へと撃った矢が，空に通じる道を作るという出来事が１つの民話に見られる。この民話の他の挿話はすべてヤクート起源なので，この挿話もあるいはヤクート起源のものなのかもしれない。

人間と動物との結婚の多くは，若者とネズミあるいはカエルの娘との間のものである。ユカギール語ではこれらの動物の名前は醜さと同義である。

ユカギール民話において，鉄の人間，鉄の家，あるいは銀の服などが出現するのは，ヤクートあるいはツングースの影響によるものであろう。

すでに述べたように（p.154 を参照），異界の老人や異界の老婆[25]は，人間に敵意を持つ類に属している。それらに供物が捧げられることはない。それらは病気を引き起こす ku'kul のような神のように見なされることもない。ツンドラ・ユカギールだけが時に，コリマ・ユカギールの ku'kul に相当する ko'rel（という単語）を，異界の老人の代わりに使用することがある。異界の老人はユカギールの崇拝の対象の中に場所を占めていないが，生活の中では重要な役割を演じる。異界の人々は，人間が絶えまなく戦い続けなくてはならないような，敵意に満ちた者である。このような害をもたらす者を捧げものや祈りで鎮めることはできないので，他の手段，主として策略によって，打ち負かさなくてはならない。

異界の老人は，ユカギールの想像によれば，巨人や人食いであり，身体的かつ超自然的な力を有するが，低い知性しか持たない。策略によってこれらから逃れることは，このような愚かな怪物に食われる危険に影響されているのであろう。

いくつかの民話で異界の老人は，あたかも人間が動物を狩るがごとくに人間を狩る，巨大な人食いとして描写されている。異界の人々は非常に長身なので，殺したヘラジカを自分の上着の紐に括りつけて持ち歩いている。異界の老人・老婆は，海の人々と森の人々に二分される。

ユカギールの伝承の中で第１位を占めるのは，この異界の人々についての民話である。それらは最も純粋なユカギール民話だ。以前に出版した 27 話からなるユカギール民話のシリーズのうち，10 話がこの異界の人々についてのものであった。

これらの民話のいくつかの内容を以下に引用しよう。

> ３人の若者[26]が狩に出た。犬の代わりに野ウサギを橇に繋いだ。途中で彼らは，人食いが住んでいる家の中で夜を過ごした。男の子のいる未亡人だけが家の中にいた。彼女は若者たちに食べ物を提供した。若者たちは野ウサギにやる草を求めた。この家の未亡人は彼らの求めに応じた。若者たちが外に出た時，この未亡人が草の代わりに人間の毛を野ウサギにやっているのを目撃した。この家の主人は何者かと考え，若者たちは逃げ出そうと決心するが，男の子がそれを見ていた。若者たちは小指

25）［訳者注］この翻訳における「異界の」に相当する本文中の英単語は mythical である。現に存在し，人間に危害を加える不気味さを表わすために，この訳語を採用している。

26）W. Jochelson, Materials, etc. p.6 を参照。

を切ってこの人食いの少年に与え，母親に自分たちが逃げることを言わないように頼んだ。少年は約束を守った。若者たちが逃げ出したことを母親は知り，男の子を殺して，若者たちに追いつこうとした。しかし追いつくことができないまま母親は家に戻った。夫が戻ってくると，夫婦は男の子を食べるが，その後で死んだ。

第 4 番の民話[27]は少女についての物語であるが，この少女は海の向こう側にいる人食いの娘であり，若い男を誘惑して自分の後を追わせる。少女は若者を自分のカヌーに乗せて両親のところに連れて行った。夜になって 2 人が寝床に入ると，若者は少女を殺して，そのカヌーで逃げ出した。両親は娘の体を若者の体と間違え，娘を料理して食べ，その後死んだ。

14 番の民話[28]では，兄弟 2 人がキツネの罠を仕掛けに行ったことが物語られる。彼らは異界の老人が歌うのをふと耳にして，一方の罠の下に隠れた。異界の老人が息子と一緒にやってきて，「ほら，お前に言ったように，俺の罠には獲物がかかるのだ」と息子に言った。老人は若い狩人たちを炙るために串の用意をし，その間息子は遊び回って罠の上に乗った。息子は狩人たちの耳を引っ張って「僕はこれを食べよう」と言った。狩人たちは息子に向かい，「お前が自分の父を殺すなら，俺たちの妹をお前にやろう」とささやいた。そのとき異界の老人は，木に掛けた鉄のかんじきの下に座っているところだった。男の子がかんじきを叩くと，かんじきが落下して父親の頭を切り落とした。狩人たちは少年を村に連れ帰り，妹を妻として与えた。この人食いの少年は食べ物を求めて人間を狩ったが，妻の親類には手を出さなかった。あるとき狩が不首尾に終わった。彼は食べ物が得られず，腹を空かして帰宅した。妻と一緒に寝床に居る時，彼は妻の胸に触り，「亡くなった父親がこういうもので食べ物をくれた」と言った。次の朝，この人食いが人間を狩りに出て行くと，妻は夫が言ったことを母親に伝えた。村人は夫を殺すことに決めた。彼らは湖の氷に穴を開け，その上を雪で覆った。人食いが家に帰ってくると，村の若者たちが湖の上で遊び始め，その一群がこう叫んだ。「お兄さん，助けに来て。僕たちが負けちゃうよ」―「俺はとても疲れているのだ」と人食いは言った。「いいじゃないか，こっちに来てよ」と若者たちが言う。人食いはやってきて，氷の穴に落ちる。手で氷の端をつかんだものの，人々は斧でその腕を切り落とした。人食いは，「お前たちは俺を殺したが，それでも俺は生き続ける，覚えていろ」と言いながら穴に落ちた。次の朝，人々は起きて火を起こそうとしたが，火を起こそうとするたびに水が跳び上がってきて火が消されてしまった。こうして人々は火を得られず，死んでしまった。

異界の老人についての別の民話[29]では，魔術の飛行として知られる挿話が見出される。ある老人が漁網を探しに氷に開けた穴へと向かった。氷の穴の中を探すうちに彼は，筏に乗って川を下ってきた異界の老人にあごひげを掴まれた。異界の老人は「お前の息子と娘を俺にくれ

27） W. Jochelson, Materials, etc. p.7 を参照。
28） 同書 p.7 を参照。
29） W. Jochelson, Materials, etc. p.19 を参照。

れば，お前を自由にしてやろう」と彼に言い，彼はそうすると約束した。異界の老人は彼を放し，彼が子どもたちをすぐに連れてきて氷の穴の中に入れてやると，異界の老人は子どもたちを筏に乗せた。こうして川を下って行った。異界の老人はズボンを脱ぎ，蚤取りをさせるために子どもたちに渡して，眠り込んでしまった。ハヤブサがやってきて，子どもたちを父親のところに連れて行ってやろうと提案した。子どもたちはハヤブサの背に乗り，ハヤブサは川を上って子どもたちの家に飛んで行った。目が覚めて，子どもたちが消え失せたことに気付いた異界の老人は，下顎をはずしてまじないを始めた。川上に向かって下顎を投げると，下顎は歯を上に向けて落ちた。すると瞬時に子どもたちは筏に連れ戻された。異界の老人は子どもたちを釣り竿で叩き，二度と逃げ出さないように警告した。

異界の老人はふたたび自分のズボンを，蚤取りのために子どもたちに渡して，眠り込んだ。するとワシがやってきて，子どもたちを川の上流へと連れて行った。異界の老人は目を覚ますと，下顎を使って再びまじないを繰り返した。子どもたちは再び筏に連れ戻された。

3度目は，雌牛[30]がやってきて，子どもたちを救ってやろうと提案した。子どもたちは雌牛の背中に乗り，雌牛は子どもたちを山に運んでいった。異界の老人は目覚めて，子どもたちがいないことに気付くと，下顎を使って同じまじないを始めた。彼は下顎を色々な方向に投げた。川の上流へ，下流へ，そして空に向かって投げたが，何度やっても下顎は歯を下に向けて落ちた。最後に川の土手の方向に投げると，下顎は正しい向きになって落ちた。異界の老人は筏から降り，すぐに子どもたちの匂いを嗅ぎつけた。子どもたちを追いかけて行き，雌牛に追いつきそうになった。雌牛は子どもたちに，「私の首から泥落としを取って，後ろに投げなさい」と言った。子どもたちがそうすると，高い山が聳え立った。異界の老人はその山を越えることができなかったので，筏に戻って錐を取り，山に穴を開けた。彼はその中を通り，また雌牛に追いつきそうになった。雌牛は子どもたちに，首の毛から櫛を取り，後ろに投げよと言った。子どもたちがそうすると，櫛は深い森になった。異界の老人は筏に戻り，斧を取って，森の木々を切り倒した。老人が雌牛に再び追いつきそうになると，雌牛は子どもたちに，首の毛から「胸飾り」[31]を取って，後ろに投げよと言った。子どもたちがそうすると，「胸飾り」は

30）「魔術の飛行」において雌牛が救い手となる挿話は明らかにロシア人から借用されたものである。ユカギールの領域にロシア人とヤクートが現れる以前には，角を持つ牛はユカギールには知られていなかった。アファナシェフが編集したロシア民話集では，馬と雄牛が「魔術の飛行」における救い手として現れる（A. N. Afanasyev, Russian Folk Tales, Moscow, 1873. Part II, pp.195, 196; 本文ロシア語，を参照）。一方ユカギール民話のいくつかでは動物の救い手が現れない魔術の飛行の挿話もある（W. Bogoras, The Folklore of North-eastern Asia. American Anthropologist IV, No.2, p.626 を参照）。「魔術の飛行」に関するコリャーク民話とチュクチ民話については，W. Jochelson, The Koryak, pp.156, 259 および W. Bogoras, Chukchee Mythology, p.40 を参照。「魔術の飛行」の挿話の比較的概観に関しては W. Jochelson, The Magic Flight as a Wide-spread Folk-lore Episode. Anuchin Anniversary Volume, Moscow, 1913, pp.155−156 を参照。

31）「胸飾り」―ユカギール語では *me'lun-poǰerxo'*―は，女性がエプロンの胸の部分に飾りとして縫い込む金属の輪のこと。

広い海となり，異界の老人は溺れ死んだ。子どもたちはこうして救われた。

異界の人々は，あたかも人間のごとく，人を求めて家族でさすらっている。ある民話[32]は，異界の人々の夫婦が，遊牧するユカギール人の後をつける様子を物語る。この民話ではいわゆる寄生の動機や害獣の起源のような，アメリカインディアンの民話でよく見られる挿話や，話す犬の挿話が見られる。

昔々あるところに，2人の異界の人々，夫と妻がいて，2つの道が分かれる場所に来た。彼らはここで別々になり，それぞれ違う遊牧キャンプを求めて進んで行った。異界の女はテントに着き，中に入った。主人は狩に出かけていて，妻と赤ん坊が中にいた。異界の女はテントの真ん中に座った。女主人はあらゆる食べ物を出したが，異界の女は食べるのを断った。客は「お互いの虱を取りましょう」と言った。まず女主人が客の虱を取ろうとすると，髪の中に虱の代わりに鼠がいた。次に客が女主人の虱を取ろうとした。客は髪を首に巻きつけて女主人を殺した。客は女主人の衣服を剥ぎ取り，彼女を殺してその肉を食べた。それから女主人の服を着ようとしたが，服はとてもきつかった。そこで斧を取って体の一部を切り落とし，その服を着た。主人が家に戻ってくると，異界の女は妻のふりをして主人を迎えたが，主人は怪しみ，翌朝自分の両親の家に行って，彼と別々に眠るように女に言った。翌朝彼らは旅立った。主人は同行者たちの先を行き，親戚の者たちに急いで追いついて，異界の女が妻を殺し，妻のふりをしてこちらにやってくると告げた。彼らは薪を積み上げて火を起こし，主人の兄弟たちが女を出迎えると，その腕を取って，「お姉さん，一緒に遊びましょう」と言った。彼らは一緒に踊り，しまいに女を火の中に突き飛ばした。女は焼け死に，鼠がその灰から逃げ出した。

異界の男の方は，途中で川に着いた。川の向こう岸で人々が魚を捕っていた。

男は,「どうやって川を渡ればよいのか？俺に川を渡らせてくれないか」と歌い始めた。人々は,「川を下って行け。浅瀬がある」と答えた。その人々は，話せる犬を残して去った。また草の小屋も建てていった。男はそこにやってきて犬に,「皆はどこにいる」と尋ねた。「行ってしまったよ」と犬は答えた。「俺は腹が空いている。やなの中から魚を出してくれ」と男は言った。「自分で出しな」と犬は言った。異界の男はやなから魚を全部取り出し，それらを食べて，草の小屋の中で眠ってしまった。犬は小屋に火を着けた。男は焼け死に，内臓が破裂した。こうして2人の人食いは罰せられた。

話す犬という挿話はコリャークの民話[33]にも，いくらか異なった形で見られる。人食いのカラが大鴉の飼っていた話す犬たちに，自分の息子のエメムグットがどのように川を渡ったのかとたずねた。犬たちは,「彼は川の水を飲みほして向こう岸に渡り，水をみな吐き出したのさ」と答える。カラは水を飲み，やがて腹が張り裂けてしまった。―この挿話はまたエ

32） Jochelson, Materials, etc., p.47 を参照。

33） Jochelson, The Koryak, p.141 を参照。

スキモー民話にも見られる[34]。

27番の民話[35]では，異界の老人が２人の姉妹を追いかけ，その１人に追いついて殺し，食べてしまう様が語られる。もう１人の少女は自分を守ってくれる異界の男に出会い，追ってくる老人を殺す。すると異界の男は美しい若者になり，２人は結婚する。

異界の人々は超自然的な力を与えられているものの，彼らは身体的な力でのみ人を攻撃するのであり，知力はなく愚かで，人間はかれらを計略によって退けうることを，私はすでに指摘した（p.303を参照）。ここまでに例に挙げた民話から，これらの人食いが人間のすぐれた知力によって打ち負かされる様子を見てきた。他の民話においては，異界の人々は人食いではなく，単にひょうきんな愚か者として現れる。

前に例にあげた民話（p.300を参照）においては，異界の男が屋根の煙穴を通って野ウサギの小屋にやってきて，腹が空いているからと食べ物を要求した。野ウサギは紐の片方の端を振って見せた。もう一方の端を家の柱に結んで男に，「強く引いてごらん。紐にたくさんの肉を結んでおいたから」と言った。異界の男は力をこめて引っ張った。紐はちぎれ，異界の男は地面に転び，押しつぶされて死んだ。

22番の民話[36]においては，異界の老人が人のいない遊牧キャンプに現れ，紐で柱につながれた犬を見つけた。異界の老人は犬を放してやった。犬は突然襲い掛かり，老人に飛びついて，引きずり回した。異界の老人は紐の端を首に結び，「そうだ，これで歩かなくてもいい。犬が女主人のところまで連れて行ってくれるのだから」と独り言を言った。犬はなおも老人を引きずり，男の体は千切れてしまった。

他の民話[37]では，英雄であるデゲベイが異界の老人を笑いものにする。デゲベイは老人に，ひとりでに湯が沸くやかんを与えた。またひとりでに物を切る斧も与えた。しかしそのやかんも斧も，異界の老人に向かっては，言われた仕事をしなかった。しまいにデゲベイは，巧みな策略を用いて，異界の老人とその妻を殺すことになる。

人間の仕掛けた策略から逃れるために，異界の老人は目に見えなくなることがある（これがどのように起こるかについては，上記p.287を参照）。現在ユカギールは，異界の老人は目に見えず，それゆえ１人で旅する者を襲うと言う。この理由のためにユカギールは集団で狩に行き，１人では行かない。

コルコドン川流域で私は，ヤサーチナ川沿いを去ってから２度と姿を見たことのない彼らの氏族の老人とその妻についての話を聞いた。コルコドン川沿いのユカギールは，この２人が異界の人々に殺されて食べられてしまったと信じている。

34）Boas, Baffin Land Eskimo, p.177を参照。

35）Jochelson, Materials, etc., p.70を参照。

36）Jochelson, Materials, etc., p.54を参照。

37）Jochelson, Materials, etc., p.38を参照。

ユカギール民話には異界の人々の他にも，人食いの妖怪が登場する。23 番の民話では[38]，首に歯がある人食いの女が描写される。女は自分の娘に求婚しにきた若者を殺したという。この民話が思い起こさせるのは，肛門に歯がある人食い女についてのコリャーク民話[39]と，膣に歯がある女についてのチュクチやインディアンの民話[40]である。これらの民話ではすべて，若者は石あるいはそれに似た物を使って歯を打ち砕く。

人食いの妖怪についてのユカギール民話を検討する際に問題になるのは，ユカギールにおいて遠い過去に食人の風習が存在したという徴候を，これらの民話が与えてくるかどうか，ということである。この推測は，そのような多くの民話において，人食いが親戚の者の肉を食べた後で死んだという挿話があるという根拠により，頷けるものである。このような挿話から引き出せる結論は，食人の風習が行われてはいたけれども，その対象となったのはよそ者だけだった時代を，これらの民話が反映しているのではないかということだ。たとえば 3 番の民話[41]では，人食いとその妻が，自分の子どもを食べた後に死ぬ。4 番の民話[42]は人食いの娘についてであるが，この娘は若者を殺そうとして誘惑するがうまくいかない。逆に若者の方が，一緒に寝ている間に娘の首を切り落として殺し，自分のカヌーで逃げ去る。人食いの娘の両親は朝起きて，若者を食べようとしているのだと思って自分の娘の体を茹でてしまう。食べている間に，「この若者とはどの血筋でつながっているのか？心臓がどきどきする」と言う。彼らは娘を探しに行き，まもなく自らの娘を食べてしまったことに気付く。彼らは若者をボートで追いかけて行き，海で溺れ死ぬ。

また別の民話 6 番[43]では，トナカイの凍った血を混ぜた雪の代わりに，自分の鼻から出た凍った血を混ぜた雪を，野ウサギが自分の母親に与える。自分の息子の血を食べた後で，野ウサギの母親は死ぬ。

以前に参照した民話[44]では，ある女と結婚した人食いが，女の親戚の範囲外の男を狩るということが語られている。

あるいはまた，人間の解剖学についてのユカギールの正確な知識も，死んだシャーマンの体を切り刻むという習慣に加えて，過去にあるいは存在した食人の風習によって説明できる可能性もあろう。以前に述べたように（pp.163−165 を参照），死んだシャーマンの骨から切り取られた肉はお守りとなる。あるユカギール民話[45]では，孤児である 3 人姉妹の 1 人が，

38） Jochelson, Materials, etc., p.54 を参照。
39） Jochelson, The Koryak, p.161 を参照。
40） Bogoras, The Folklore of Northeastern Asia（American Anthropologist, IV, p.667）; Boas, Indianische Sagen, pp.24, 30, 61, 69; Farrand, Chilcotin Indians, p.13 を参照。
41） Jochelson, Materials, etc., p.6 を参照。
42） Jochelson, Materials, etc., p.7 を参照。
43） Jochelson, Materials, etc., p.11 を参照。
44） Jochelson, Materials, etc., p.29 および本書 p.304 を参照。

死んだ父の肉を食べた後に人食いとなったことが語られる。残る２人の少女は魔法の翼に乗って飛び，その人食いから逃れる。

以前に私は，近年に起こった飢饉の最中での食人の２つの事例を紹介した（p.54 を参照）。

私の通訳を務めたドルガノフは，食人の風習について私が尋ねると，既に亡くなった祖父から *čoro'-moleun·ul-o'mo* という，人間を狩る食人種について聞いたことがあると語った。この祖父はまた，南の国に，体がトナカイで頭と腕が人間のものであるような民族が住んでいると語ったこともあるそうだ。この民族は人間を襲い，殺した場合にその肉を食べるということである。ここで挙げた資料すべては，ユカギールに以前存在していた食人の風習の可能性を示すものかもしれない。

原始的な諸民族においても，たとえばアフリカのように高度な文化を有する諸民族においても，食人の風習が人間の生贄と結びついていることが知られている。人間の生贄はユカギールの民話１つに言及があるが，その肉体をどのように使うかについては何も語られていない。生贄になった少女は吊るされる（p.147 を参照）が，このようにして殺された人が食べられたと考えることはおそらく難しい。

【謝辞】この翻訳を作成するにあたり，訳者の数回の現地調査の際，コリマ・ユカギールの文化について詳しく，また親切に教えてくださったネレムノエ村の皆様方に感謝申し上げます。皆様のご教示がなかったら，この記述を深く理解することはできませんでした。またこの翻訳は JSPS 科研費 22520434 の助成を受けた研究の成果の一部です。

↙ 45）Jochelson, Materials, etc., p.201 を参照。

From Waldemar Jochelson's Yukaghir Ethnography (4): An Annotated Japanese Translation of a Chapter

Fubito ENDO

Abstract

This is an annotated Japanese translation of "Characteristics of Yukaghir Folklore," Chapter 14 of the Yukaghir ethnography *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus* by Waldemar Jochelson (1855–1937) (Leiden: E. J. Brill, 1926). The ethnography is the achievement of Jochelson's extensive fieldwork on the Yukaghir people in Northeast Siberia conducted in the years 1895–96 and 1901–2. This chapter points out the characteristics of Yukaghir folklore by examining some 30 Yukaghir folktales from Jochelson's own collection. It provides ethnological, literal, and comparative perspectives on the folktales, many of which are still told even today.